

神話的世界観とは

アレクサンドロス大王が愛したホメロスの『イリアス』に描かれる世界観が神話的世界観に他ならない。人間たちの戦争は神々の行いに由来し、その勝敗も神々に左右される。**世界の出来事や人間の運命（モイラ）も神々のわざによるものだという世界観**である。アレクサンドロス大王もエジプトの神殿で自らが神の血を引く**半神（ヘロス＝ヒーロー（英雄））**であるという神託を受け、世界支配を目指したという。

ホメロスの世界とアレクサンドロス——トロイアの祈り

野町啓（2000）『謎の古代都市 アレクサンドリア』講談社現代新書より

先のプルタルコスによると、アレクサンドロスは、単に酒好きの英雄というにとどまらず、大変な読書家であり、とりわけホメロスの『イリアス』を愛好し、学問上の師アリストテレスによる校訂本を、宿敵ダレイオスが所持していたという豪華な小箱（「ナルテコスの小筐」と呼ばれる茴香の一種から作られた貴重品保存用の小箱）に入れ、枕頭の書としていたという。では、なぜ彼がホメロス、ことに『イリアス』を愛読したのであろうか。これに答えるためにも、また『イリアス』と彼、ひいてはアレクサンドリアとの関わりを述べるためにも、まず物語の背景となっている「トロイア戦争」についてふれておかなければならない。

トロイア戦争は、簡単に言ってしまうと、ギリシアきっての美女、ペロポネソス半島南部のラケダイモン（スパルタ）の王メネラオスの妃ヘレネが、エーゲ海をはさんで対岸にある小アジアのトロイア（別名イリオン。なお『イリアス』とは「イリオンにまつわる物語」を意味する）の王子パリスに連れ去られたことに端を発する。しかもこのパリスは、アレクサンドロスとも呼ばれ、当面の主題となっているアレクサンドロスと同名なのである。古代にあっては、同名の人物が多数存在することは別に珍しい現象ではない。例えば、紀元後三世紀頃ディオゲネス・ラエルティオスにより著された『ギリシア哲学者の生涯と教説』という、タレスから始まってエピクロスに至る著名な思想家ごとに一章ずつをあてた書物がある。この本では、各章の末尾を「ところでプラトンという名の人間はほかにもこれこれしかじかの人がいた」という記述で締めている。したがって同名の場合、父親の名や出身地、属する学派を名前につけて区別することになる。アレクサンドロス自身についても、「大王」（メガス）という称号をつけたり、「三世」を付すことが示すように、彼の家系にはアレクサンドロス一世、二世という同名の王がすでにいた。だがパリスとアレクサンドロス大王とは、単に名前にとどまらず、アレクサンドリアの建設に関し伝説上とはいえ、浅からぬ因縁で結ばれてくるのである。

トロイア戦争のそもそもの発端は、オリンポスの最高神ゼウスの意志へと遡る。ある時大地を宰領する女神ガイアが、人間たちに敬神の念が薄らぎ、しかも人口が増えてその重さに耐えられなくなったとゼウスに訴えた。いつの場合でも、人間の数を減少させる最も有効な手段は戦争である。ゼウスの場合も例外ではなく、ひとつ戦争を引き起こそうと考え、次のように事を運んだのである。海神ポセイドンと人間ペレウスの結婚式——ちなみにこの両者の子がアキレウスであり、彼は神と人間の子、つまり半神＝ヘロス（英雄）ということになる——の宴席に諸神は招かれたのに、わざと不和・争いを宰領する女神エリスだけは除かれるように謀った。それを恨んだエリスは、「いちばん美しい女神に」と書かれた黄金の林檎を宴席に投げ入れたため、ゼウスの妻ヘラとアテナ、アフロディテの三女神の間で、誰が最も美しいかをめぐって争いが生じ、ゼウスの命令でパリスの審判を仰ぐことになる。パリスはトロイアの王プリアモスとその妃ヘカベの末子であったが、誕生の時、生かしておくとう王家に禍いをもたらすという予言があり、トルコ西部古代フリュギアのイデ山（ガズ山）の麓に捨てられていたのである。そこでパリスに対し、三女神は、それぞれ、自分をいちばん美しいと判定してくれるなら、ヘラは世界の支配権、アテナは戦争における常勝、アフロディテは美女をあたえることを約束するが、結局パリスはアフロディテに裁定を下すのである。そしていわばその見返りとして、先にふれたラケダイモンの王メネラオスの妃ヘレネを奪い、故国へと帰還するのである。このヘレネを取り戻すため、メネラオスの兄、当時ペロポネオス半島北部アルゴス地方（ミュケナイ）を支配していたアガメムノンを総大将として、ギリシア軍が小アジアの北西部、現在のトルコ領にあるトロイアへと進攻するのがいわゆるトロイア戦争であり、ホメロスの大叙事詩『イリアス』の背景にほかならない。

ここであえて「背景」と言ったのは、現在われわれが手にしている『イリアス』全二四巻、一万五六九三行には、戦争の発端についての明確な叙述はない。その最終巻にほんの数行「パリスの審判」についてふれられているにすぎないからである。そこに展開されているのは、トロイア戦争一〇年目の数十日間、ギリシア方随一の英雄アキレウスと総大将アガメムノンとの戦利品として捕らえられた女性をめぐる確執、親友パトロクロスがトロイア方の総大将、パリスの長兄ヘクトルに討たれたことへのアキレウスの怒りと復讐の物語なのである。トロイア戦争をめぐるのは、現存の書物の形で残されている『イリアス』の他にも、いくつかの物語が「ホメリダイ」（ホメロスの後裔）と称する吟遊詩人たちにより口誦され、口承されてきた。そのほとんどは散逸してしまったが、戦争のこうした発端をテーマとしたものに叙事詩『キュプリア』のあったことが、ヘロドトスにより伝えられている。この叙事詩『キュプリア』自体も伝存しないが、ネオプラトニズムの主要な思想家の一人、紀元後五世紀のプロクロスのある著書にその梗概が記されたことから、われわれは上述のような経緯を知ることができる。しかもこの場合、より正確に言うと、プロクロスのこの本自体も現存してはいない。だが、アレクサンドリアの文献学研究の精神を継承する、コンスタンティノーブルの学者かつ大司教、九世紀のフォティオスの、先のディオドロスと同名の図書館を意味する『ビブリオテケー』の一節に、プロクロスの著書の内容が伝存されており、こうした二重の経路を辿って、トロイア戦争の発端について、どのような物語がなされたかをわれわれは知ることができたのである。

エティエンヌ・ジョラ 《パトロクロスの死の復讐に出かけるアキレウス》



古代ギリシアと神話　そして哲学の誕生

オデュッセイア Odysseia

『日本大百科全書』（小学館）松平千秋

『イリアス』とともにホメロスの作とされる古代ギリシアの英雄叙事詩。今日では『イリアス』より約一世代遅れて紀元前 8 世紀末に制作されたもので、その作者も『イリアス』の作者と同一人ではないと考える学者が多い。『イリアス』より約 3000 行短く、1 万 2000 行にわずかに足りない。『イリアス』同様 24 巻に分かれ、ギリシア語アルファベット 24 字で順序を示す。題名は「オデュッセウスの歌」の意で、トロヤ落城後、さらに 10 年にわたって各地を放浪した英雄オデュッセウスを主人公とした冒険談である。

物語は放浪生活も終わりに近く、オデュッセウスはニンフのカリプソに愛され、オギュギエの島に留められてすでに 7 年になる時点から始まる。一方オデュッセウスの故国イタケでは、彼はすでに死亡したものとして、近隣の貴族の若者たち多数が妃(きさき)ペネロペイアに求婚し、屋敷に居座っては宴遊に明け暮れ、妃とひとり息子のテレマコスを悩ませている。やがてオデュッセウスは故国へ帰り、テレマコスと力をあわせて悪虐な求婚者たちをことごとく討ち果たすまでの、約 40 日間のできごとが詩の内容である。

冒頭、神々の会議が開かれ、アテネの発議でオデュッセウスを帰国させることが決定される。巻 1～4 では、アテネに激励されたテレマコスが、求婚者たちに対抗する決意を固めるとともに、父の消息を求めて、ピロスのネストル、スパルタのメネラオスを訪ねる。

巻 5 から話はオデュッセウスに移り、神ヘルメスがカリプソにゼウスの意を伝え、オデュッセウスは筏(いかだ)に乗って帰国しようとするが、ポセイドンの起こした嵐(あらし)で難破し、からくもスケリエ島に漂着、ここの住民パイエクス人の保護を受ける。巻 6～12 は、パイエクス人の王アルキノオスの館(やかた)で、オデュッセウスが物語る数々の冒険談がその大部分を占める。

物語のほとんどすべては、隻眼(せきがん)の巨人キクロペスや歌う魔女セイレンなどの怪異談である。巻 13 でイタケに帰還したオデュッセウスは、テレマコスと忠義な豚飼いエウマイオスの協力を得て、悪人たちを討ち、妻ペネロペイア、老父ラエルテスと再会、求婚者たちの遺族との対決も、アテネの介入によって回避され、万事めでたく終わる。全編中カリプソの島の美しい自然描写(巻 5)、パイエクスの王女ナウシカアのかれんな姿(巻 6)、キクロペスの物語(巻 9)、乳母(うば)に足を洗わすとき古傷を見られて素姓を悟られる場面(巻 19)、かたくなに認知を拒むペネロペイアが、ついにオデュッセウスを夫と認めるくだり(巻 23)などは、とくに印象深い名場面である。

イリアスとオデュッセイア

村田数之亮他『世界の歴史 4 ギリシア』(河出書房新社, 1989)

怒り嫉妬し策略する。“神”

ホメロスのふたつの詩に描かれた事件は、すべて神が背後にあって糸をひき、その意向によって進行する。戦いの勝敗も英雄の死や負傷も、また航海の成否も最後には神の予定や裁決によって定められる。

人間である英雄は、神意を十分に知ることはできない。しかしかれらは厭世的になることなく、自分の能力のかぎりをつくして、倒れ、あるいは敗れる。かれらの努力は、自己に課せられた義務をあくまでつくすことにむけられる。それは、自主的に決意し、自己に忠実になろうとする努力だ。それはまた、神意にかかわりなく、人間としての存在の主張である。

カオス（混沌）から生まれるコスモス（秩序）——ヘシオドス『神統記』

ヘシオドス，廣川洋一訳『神統記』（岩波文庫，1984）

原初の生成

まず原初にカオスが生じた さてつぎに

胸幅広い大地（ガイア） 雪を戴くオリュンポスの頂に

宮居する八百万（やおよろず）の神々の常久（とこしえ）に揺るぎない御座（みくら）なる大地 と

路広（みちびろ）の大地の奥底にある曖々（あいあい）たるタルタロス

さらに不死の神々のうちでも並びなく美しいエロスが生じたもうた。

この神は四肢の力を萎えさせ 神々と人間ども よろずの者の胸うちの思慮と考え深い心をうち拉（ひし）ぐ。

カオスの子

カオスから 幽冥（エレボス）と暗い夜（ニュクス）が生じた

次によるから 澄明（アイテル）と昼日（ヘメレ）が生じた

夜が幽冥と情愛の契りして身重となり 生みたもうたのである。

パンドラの箱 ※——ヘシオドス『仕事と日』

ヘシオドス：逸身喜一郎『岩波哲学思想辞典』（岩波書店）

プロメテウスの神話は『神統記』ならびに『仕事と日』にあつては、ゼウスにより人間に罰として与えられた最初の女性パンドラがさまざまな災いを閉じ込めてあつた大甕を開いた結果、人類には労苦が満ちるようになったとする、労働の起源とも言える神話も語られる。しかし〈希望〉はなおも残つたとこの物語が示すように、ヘシオドスは労働に信を置く。勤勉に働くことこそ餓えを退け、富へと導くのである。

『仕事と日』の中ではまた、検量を握つた者が力に任せて好き勝手に振舞つてはならないこと、すなわち正義が労働と並んで力説されている。その他きわめて具体的な生活の知恵や人生訓も、数多く語られている。

※パンドラの箱：ゼウスがパンドラに持たせた、あらゆる災いの詰まつた箱（本来は壺）。彼女が地上に着いたとき好奇心から開けたところ、すべての災いが地上に飛び出したが、急いでふたをしたので希望だけが残つたという。

「驚異」から始まる哲学 —— アリストテレス『形而上学』

アリストテレス，出隆 訳『形而上学』（岩波文庫，1959）

諸学のうちで最も王者的であり、いずれの隷属的な学よりもいっそう著しく王者的であるのは、おのおのの物事が何のために（何を目的として）なされるべきかを知っているところの学である。そしてこの目的は、そのおのおのにおいてはそれぞれの善であり、全般的には自然全体における最高善である。さて、上述のすべてからして我々の求めているもの（知恵）の名前は、まさにこの同じ学に与えられる。すなわちそれは、**第一の原理や原因を研究する理論（観想）的な学**であらねばならない、というのは、善と正しい目的というのも原因の一種だからである。

ところで、この知恵は制作的ではない。このことは、かつて最初に知恵を愛求した人々のことからみても明らかである。けだし、**驚異することによって人間は、今日でもそうであるがあの最初の場合にもあのように知恵を愛求し（哲学し）始めたのである。**ただしそのはじめには、ごく身近の不思議な事柄に驚異の念を抱き、それからだいに少しずつ進んで遙かに大きな事象についても疑念を抱くようになったのである。たとえば、月の受ける諸相だの太陽や星の諸態だのについて、あるいはまた全宇宙の生成について。ところで、このように疑念を抱き脅威を感じるものは自分を無知なものだと考える。それゆえに、神話の愛好家もまた或る意味では知恵の愛求者（哲学者）である。というのは神話が驚異さるべき不思議なことどもからなっているからである。

語源——ギリシア語起源の言葉

そもそも、” It was Greek to me.” (「わたしにはちんぷんかんぷんだった」) という台詞がシェークスピアの『ジュリアス・シーザー』の中で使われているように、イギリス人たちにとってもギリシア語は難解な言語だったのである。しかし、英語の中にもギリシア語起源の単語はたくさんある。そして、それはカタカナ日本語の中にもたくさん入り込んでいる。

ギリシア文字

大文字	小文字	名称	音価
A	α	alpha	a
B	β	beta	b
Γ	γ	gamma	g
Δ	δ	delta	d
E	ε	epsilon	e
Z	ζ	zeta	z
H	η	eta	ē
Θ	θ	theta	th
I	ι	iota	i
K	κ	kappa	k(c)
Λ	λ	lambda	l
M	μ	mu	m
N	ν	nu	n
Ξ	ξ	xi	x
O	ο	omicron	o
Π	π	pi	p
P	ρ	rho	r(rh)
Σ	σ	sigma	s
T	τ	tau	t
Υ	υ	upsilon	y
Φ	φ	phi	ph
X	χ	khi	kh(ch)
Ψ	ψ	psi	ps
Ω	ω	omega	ō

ギリシア語語源の言葉

Φ Ι Ρ Ο Σ Ο Φ Ι Α (philosophia) phileo = 愛する + sophia = 知恵
⇒ 知恵を愛すること ⇒ philosophy(英語) = 哲学・フィロソフィー

Φ ι λ ό π ο ν ο ς (philoponos) = 労働を愛する

⇒ ヒロポン (Philopon) とはメタンフェタミンの商品名であり、覚醒剤と同成分の薬品の名。「疲労をポンと取る」にも掛けている。

フィルハーモニー (philharmonic)

= φ ι λ ο ς (愛好する) + α ρ μ ο ν ι α (調和)

Sophia University = () 大学

聖母連祷: 聖母マリアに神へのとりなしを願う祈り

Sedes sapintiae (羅甸語) = Seat of wisdom = 上智の座

Θ Ε Ω Ρ Ι Α (thoria) テオリア (観想, 観照, 理論) ← θ ε ω ρ ε ι ν (theorein) 見る

⇒theory () ⇔ () 実践 ←πρασσεῖν (prassein) 達成する

メソポタミア (Μεσοποταμία) ←μῆσος (真ん中の) + ποταμός (河)

cf. hippopotamus () ←ἵππος (馬) + ποταμός (河)

cf. フィリピン (Philippine) ←フェリペ二世 (Philip) ←Φίλιππος ()

写真 (photograph) ← ΠΩΤΟΣ (pōtos) 光 + ΓΡΑΦΩ (graphō) 書く

ΛΟΓΟΣ (logos) ログス (言葉, 論理, 理性, 理法, キリスト) ←λεγειν (話す)

⇒logic () -logy (~学)

-logy の英単語を調べよう

astrology : () ←αστρον (星)

anthropology : () ←ανθρωπος (人間)

⇒フィランソロピー : 企業の社会貢献活動 =phileo (愛する) +anthropos (人間)

cosmology : () ←κοσμος (宇宙, 秩序)

ecology : 環境学 ←οικος (家)

cf. economy : () = ←οικος (家) + νομια (管理)

epistemology : () ←επιστημη (知識, エピステーメー)

ethnology : (,) ←εθνος (部族)

ideology : (,) ←ιδεα (容姿, イデア)

technology : () ←τεχνη (技術)

zoology : () ←ζωον (動物)

cf. ζωον πολιτικον (zōon politicon 社会的動物)

psychology : () ←ψυχη (魂)

biology : () ←βιος (生, 生命, 生活)

cf. cynic (キニク派, 犬儒派, 皮肉屋) ←κυνικος βιος (犬のような生活)

参考図書 風間喜代三『ラテン語とギリシア語』(三省堂, 1998)

自然哲学者たち

タレス Thales (前 624 ころ—前 546 ころ)

彼は天文学を研究した最初の人であり、また日蝕や太陽の回帰を予言した最初の人であったように思われる。クセノパネスやヘロドトスが彼を賞賛しているのはそのためであり、ヘラクレイトスとデモクリトスもそのことを証言している。

万物の原理を彼は水であるとした。そして世界は生命を有しており、神々に満ちているとした。一年の四季を発見したのは彼であり、また一年を365日に分けたのも彼であるといわれている。師といえるような人は彼にはなかったが、ただエジプトへ行って、その地の神官と共に過ごしたことだけは別である。彼は影が我々と同じ長さになるときを見計らって、ピラミッドをその影から計測したとヒエロニューモスは伝えている。

ディオゲネス・ラエルティオス「ギリシア哲学者列伝」

ところで、最初に哲学した人たちの大部分は質料の意味におけるそのみを万物の原理であると考えた。なぜなら、存在するものすべてがそれから存在しているもの、第一のものであるそれから生成し、最後にはそれへと消滅して行くもの（ただし実体はそのままでありつづけ、状態の点でのみ転化する）そう言ったものを彼らは諸存在の元素であり、原理であるというからである。……タレスは、こういった哲学の開祖であるが、水がそれであるという。（それゆえ大地は水の上に浮かんでいるとかれは主張した。）彼がこのような見解を抱くにいたったのはおそらく、すべてのものの養分が湿っていること、また熱そのものも湿ったものから生じ、それによって維持されていることを見たことからであろう。だが、それから生じるところのそのものとは万物の原理である。実際こういったことによって彼はそのような見解を抱くにいたったのであろうが、またすべての種子が湿った本性を有していることによってでもあろう。水こそは湿った本性の原理なのである。

アリストテレス「形而上学」

アナクシマン드로ス Anaximandros (前 610 ころ—前 547 ころ)

古代ギリシアの哲学者。小アジアのイオニア地方の町ミレトスに生まれる。タレスの後継者とされ、『ペリ・フェセオース』（自然について）という著作があったと伝えられるが、残っているのはわずかな断片だけである。万物のもとのもの（アルケー）は無限定なもの（ト・アペイロン）であり、この神的で不滅なアペイロンから、まず暖かいものと冷たいもの、乾いたものと湿ったもの、といった性質の対立するものが分かれ、そして、争い合うこの対立するものから地水火風が生じ、さらに星辰(せいしん)や生物が生じるが、これらは掟(おきて)に従い、やがて争いの罪をあがなって死滅し、アペイロンへ戻るというのが、その教えである。また、大地は円筒状であって世界の中央に位置しているとか、人間は初めは魚に似ていたとか説くとともに、日時計を発明したりしたとも伝えられる。

「日本大百科全書」小学館

アナクシメネス Anaximenes (前 585 ころ—前 528 ころ)

古代ギリシアの哲学者。小アジアのイオニア地方の町ミレトスに生まれる。アナクシマン드로スの後継者とされるが、著作は失われ、わずかな断片を残すのみである。万物のもとのもの（アルケー）は神的な空気であり、この空気が希薄になると暖かい火が生じ、濃厚になると冷たい水や土や石などが生じるが、この希薄化と濃厚化を通じて生じたあらゆるものは、ふたたび空気へ返るとというのが、その教えの根本である。この空気はまた生命の原理でもあり、したがって人間の魂も空気であって、「空気であるわれわれの魂がわれわれを統率しているように、氣息(プネウマ)すなわち空気が世界全体を取り巻いている」と説くとともに、大地は平板状であって空気の上に乗っているとか、天体は大地から立ち上る蒸気が希薄となり火となってできあがったものであるとか説いたと伝えられる。

「日本大百科全書」小学館

パルメニデス Parmenides (前 515 ころ—前 445 ころ)

古代ギリシアの哲学者。南イタリアの町エレアに生まれる。エレア学派の始祖。富裕な名門の出身で、町の指導者の1人であったらしく、エレア市民のために法律を設定したとも伝えられる。叙事詩の韻律である六脚韻を駆使して『ペリ・フェセオース』(自然について)を書きつづったが、いまは断片が残されているのみである。この著作は、序詩、第一部、第二部といった三部からなっている。序詩は、若いパルメニデスが日の神の娘たちの駆る馬車に乗り、暗い臆見(おくけん)の世界を去って明るい真理の世界へたどり着き、女神から真理と臆見について啓示を受ける、といった寓話(ぐうわ)的な舞台を設定する。第一部は、啓示された真理を歌い、「在るもの」(ト・エオン)があり「在らぬもの」(ト・メー・エオン)はないという前提から、不生不滅、不可分、不変不動であって、完結した丸い球に似ている、といった「在るもの」の属性を引き出し、「在るもの」をわれわれに示す理性のみが真理をとらえ、「多」や生成や消滅や変化を信じさせる感覚は誤謬(ごびゆう)の源であると説く。第二部は、誤謬に満ちた臆見を歌い、感覚の世界は「在るもの」(光)と「在らぬもの」(闇(やみ))という二つの「形体」(デマス)を併置し、両者からあらゆるものを合成するところに生じると説く。こうした思索が当時の思想界に与えた影響は計り知れない。

「日本大百科全書」小学館

ゼノン (エレアの) Zenon ho Eleates (前 490/485 ころ—前 430 ころ)

古代ギリシアのエレア学派の哲学者。最初ピタゴラス学派に属したとも、政治活動に従事したとも伝えられる。エレア学派の祖パルメニデスの弟子にして親しい友人であった。パルメニデスを弁護する作品を書いたが、プラトンはその『パルメニデス』のなかで、それが若気の至りであったとゼノンに告白させている。また『パイドロス』のなかで、ゼノンについて、同じものが似ており似ていない、一であり多である、静止しており運動している、と聞く者に思わせる技術の持ち主と紹介している。そこからアリストテレスは、ゼノンを、前提から矛盾した結論を引き出す弁証論の発見者とよんだと伝えられている。不変不動の一つなる「有るもの」を思索した師パルメニデスを弁護するために、弁証論を駆使した「ゼノンの逆説」を提出した。多くのものが存在することを否定する論とアリストテレスが報告している運動否定論(「多否定論」「二分法」「アキレスと亀(かめ)」「飛矢」「競技場」)である。その精緻(せいち)な論理によって無限、連続、空間、時間、一多の問題を再検討するよう強い影響は大きかった。現代でもベルクソンをはじめ多くの人々がその「逆説」を分析解釈する努力を傾けている。しかしゼノンでは、論理は独走し、哲学は師の思索を弁護することにすり替わっていた。「日本大百科全書」小学館

ヘラクレイトス Herakleitos (前 540 ころ—?)

ギリシアの哲学者。生没年不詳だが、前 500 年ころがその活動の盛期とされる。エフェソスの王家の出身。火を万物のものとものとし、その万物は変化してやまぬと説いた哲学者とされてきたが、いわゆる〈すべては流れる(パンタ・レイ pantarhei)〉という有名な言葉もプラトンやアリストテレスの批判的解釈を継承したシンプリキオスの言葉であって、彼自身の直接の発言ではない。火や流動についてもたしかに述べてはいるが、それは彼の哲学の一面であって、もっとも重要なのは〈ロゴス〉についての考えである。〈事実、すべてはこのロゴスにしたがいて生ずるにもかかわらず、人々はなお、そを経験せざる者のごとし〉(断片 1)。〈われに聴かずにロゴスに聴きて、ロゴスに従いつつ、すべては一なりと述べるこそ賢かりけれ〉(断片 50)。

例えば彼は、弓や琴のような日常的な小道具を手がかりにしてそのロゴス支配の事態を説明しようとする。弓の弦や琴の弦は二つの逆方向に働く力の結合によって成立するが、このような対立的なものの統一的結合という理法こそが彼の強調するロゴスである。その対立的な面に注目して、彼はまたロゴスを比喩的に〈戦い〉と呼ぶ。〈戦いは万物の父、万物の王なり〉(断片 53)。こうしたロゴスの支配は人事の場面のみならず、ひろく全宇宙に及んでいる。昼と夜とは明暗の形で対立し、人々はその区別にこだわるが、実は昼は夜に、夜は昼になるのであって、その過程を通じて両者は結合して一体をなしているのである。また、火と水、水と土とはそれぞれ対立して異なるが、実は火は水に、水は火に転化し、水は土に、土は水に転化する。この宇宙論的転化の過程に注目すれば、やはり火も水も土も〈一なり〉という道理が理解されるはずなのである。だが彼のいうその道理、すなわちロゴスは人々に理解されなかった。そこに彼のいらだちと孤独があった。〈大多数の輩(やから)はさながら家畜のごとく飽食するなり〉(断片 29)。

百科事典に見るソフィストとソクラテス

ソフィスト sophistes ギリシア語 sophist 英語

紀元前5世紀なかばごろから前4世紀にかけてギリシアで活躍した知識人たちの呼び名。

多くは地方ポリス（都市国家）の出身者で、アテネほかのポリスを巡り、弁論術を中心にさまざまな専門的知識を教授することを職業とした。アブデラのプロタゴラス、レオンティノイのゴルギアス、ケオスのプロディコス、エリスのヒッピアスらが有名である。

民主政のアテネでは、議会や法廷での弁論に優れていることが、政界での、つまり市民としての成功を意味した。ソフィストたちは時代の要求にこたえ、多額の謝礼と引き換えに富家の子弟に演説や論争の技術を授けた。

講義は作文修辞の法のみならず、法律道徳論、文明論などの実質的思想にも及んだ。彼らが徹底的な形で示した言論の魅力は知的な青年たちをとりこにしたが、やがて保守的市民から過激な危険思想家と目されるようになる。ソクラテスの受難も、ソフィストと混同されて市民の反感を買ったことが一因であった。

ソフィストの思想のうち、プロタゴラスの「人間尺度命題」は人間中心主義、主観主義、相対主義の表明とみられ、ゴルギアスの「非存在の論」は知識否定論として、またトラシュマコスの「正義とは強者の利益なり」という説や、アンティフォン、ヒッピアスらの法（ノモス）と自然（ピュシス）の分離論は法や道徳に対する挑戦とみなすことができる。しかし他面では、ゴルギアスの修辞学やプロディコスの類義語用法のように、それ自体としては単に言論の手段を提供するにすぎなかったものが、アテネ市民の野心や欲望と結びついて、このような思想になったともいえよう。

哲学者プラトンはソフィストたちの名を冠した一連の作品を著し、ソクラテスと真理のために、これらの思想と対決しその虚偽を暴いた。個人と国家のために善を図り言論と行為にもっとも有能有力な者となる道を教授するというのがソフィストたちの自称であったが、彼らが実際に教えたものは、善について無知でありながら優れた人間であると思わせる方法であり、事の真偽や正邪を問わず、ただ大衆を扇動して論敵に勝つための技術であった。

ソフィストの語はこうして、詭弁（きべん）の徒を意味することとなり詭弁学派ともいわれた。ただし、事態の裏面をみるならば、ソクラテスとプラトンの哲学はソフィストたちの恐るべき論理から生まれたとも考えられ、その意味で彼らの哲学史上の意義がしばしば再評価される。（田中享英）小学館

ソクラテス 前470か469-前399

古代ギリシアの哲学者。アテナイのアロペケ区に生まれた。父ソフロニスコスは石彫家だったと伝えられるが、確証はない。母ファイナレテは助産術を心得ていた。クサンティッペと結婚したのはかなり晩年のことで、ソクラテスが死んだとき、3人の子どもはまだ年少であった。有名な悪妻伝説は、おおむね後代の誇張された作り話である。ペロポネソス戦争期に、重装歩兵として北ギリシアに2回、ボイオティアに1回従軍し、賞賛すべき忍耐力と沈着の勇を人々に印象づけた。また、このとき以外にはアテナイの町を離れることがなかったという。若いころには自然研究にもたずさわったが、後年は人間の問題のみに関心を向け、アテナイの街頭や体育場などで対話・問答を行いながら過ごした。彼の魅力的な人格とユーモアに満ちた鋭い論法に共感する若者たちが〈ソクラテスの仲間〉を形成し、プラトンもそのサークルにあって大きな影響を受けた。彼はまた一面において、年少のころから〈ダイモンの（禁止の）声〉を聞き、しばしば深い忘我状態を経験する〈憑（つ）かれた人〉でもあった。ペロポネソス戦争終結から5年後の前399年、不敬神のとがで告発を受け、裁判の結果死刑に処されて生涯を閉じた。彼は何一つ著作しなかった。プラトンの（おもに初期の）対話編のほか、クセノフォンのソクラテス関係著作が、彼の生涯と思想を知るための主要な手がかりである。

ソクラテスは、ソフィストたちの唱道する〈徳〉および世のいわゆる知者たちのもつ〈知〉を根本的に問い直した。そして、〈徳は知〉であり、〈魂への配慮〉としての知の追求こそが真に〈よく生きる＝幸福である〉ために何よりも心がけるべきことであると主張するとともに、〈知〉とは本来けっして誤ることのない絶対確実なものであるとすれば、真の知者は神のみであり、われわれ人間は善美の事柄を何一つ確実には知らない存在であると考えた。こうした自覚への機縁となったのは、〈ソクラテス以上の知者はいない〉というデルフォイの神託であった。彼はその意味を解明するために、世に知者と呼ばれている人たちを吟味して歩いた結果、彼らの方は〈何も知らないのに知っていると思ひ込んでいる〉のに対して、彼のみがみずからの無知を自覚している、すなわち〈無知の知〉という一点において相違していることに気づいた。そしてさらに、神託の真意はソクラテスに名を借りてすべての人間の無知を悟らせることにあると考えるに至った。〈徳とは何か〉〈正義とは何か〉といった問いを中心に、人々が知っていると思ひ込んでいる事柄を吟味論駁し、無知を悟らせる活動は、彼が〈神命〉としてみずからに課したものであった。この問答の過程に示された知の基準の厳格さ、論理と方法への明確な意識、〈何であるか〉という問いに込められた本質への指向などは、彼の生死のありかたそのものとともに、哲学に大きな転換と飛躍をもたらす原動力となった。 藤沢 令夫

(C) 1998-2000 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

ソクラテス問題とは何か

自ら著書を残さなかったソクラテスの生涯や思想を、プラトンたちの著作からどのように復元できるのか、あるいはソクラテスを主人公とするプラトンの対話篇の中で、プラトンとソクラテスの思想をどう区別するのかという問題をソクラテス問題という。哲学研究の現場の証言を聞いてみよう。

ソクラテスへの接近 納富信留『哲学者の誕生——ソクラテスをめぐる人々』（ちくま新書、2005）より

ソクラテス自身の営為とそれを書き著した資料との間には、「ソクラテス問題」と呼ばれる困難が横たわっている。プラトンやクセノポンらの書き物から窺われる「ソクラテス」は、それぞれ相異なった姿を示しており、それが実際のソクラテスの行状とどう重なり、どうずれているのか、が研究者を悩ませてきたのである。

「歴史的ソクラテス」の復元は、これまで、具体的には現存著作の四人の著者、アリストパネス、クセノポン、プラトン、アリストテレスの報告をどう評価するか、という問題として論じられてきた。

アリストパネスが前四二三年に上演した『雲』は、ソクラテスについての唯一の同時代資料である。しかし、喜劇としての歪曲ゆえに、この作品が「ソクラテス」復元のために用いられることはほとんどない。この取り扱いには、プラトンが描くソクラテス像からあまりにかけ離れているとの印象が働いている。「哲学者」ソクラテスが採用され、「ソフィスト」ソクラテスが一方的に退けられてきたのである。プラトン『弁明』（19C）での『雲』への否定的な言及も、大きく影響したことであろう。

弟子クセノポンは、とりわけ『ソクラテスの思い出』という貴重な言行録を残したが、そこに表われる「教育者ソクラテス」は、プラトンによる哲学的で強烈なソクラテス像とは対照的である。クセノポンは、十九世紀にはソクラテスについての証言者として尊重されていたが、二十世紀に入ると途端に厳しい評価に曝され、哲学史においてほとんど顧みられない状況が続く。彼の著作への再評価は、ようやくここ数年、一部の研究者の間で顕著になりつつある。

他方で、プラトンの描くソクラテス像にも、著者の天才ゆえに史料的价值への疑念が向けられてきた。たとえば、『パイドン』『国家』『パイドロス』等の対話篇でプラトン自身の「イデア論」をソクラテスの口から語らせているように、あまりに強烈で個性的な哲学が「ソクラテス」復元にはむしろ不都合と考えられたのである。この点では、平凡でも実直に言行を記録したクセノポンの方が、プラトンよりも信頼できるというわけである。しかし、クセノポンがソクラテスの語ったとおりを記録しているという想定も、素朴に過ぎた。たとえば、『饗宴』が叙述する、クセノポン自身がその公話の場に居今わせたという証言は、対話の年代設定からはありそうにないことであった。

第四の証人であるアリストテレスは、ソクラテスに直接の面識がない分、称讃や非難といった感情に左右されていない、と信じられている。「倫理的な事柄への定義」や「帰納法」の案出を彼に帰する記述は、より客観的な哲学評価であると考えられてきた。しかし、アリストテレスの証言はあまりに限定され、ソクラテス像への貢献は多くはない。

この四人の証言の中からもっとも信頼できる像を取り出して「歴史的ソクラテス」を復元するというプログラムは、そういった作業自体への強い懐疑を伴いながらも、結局はクセノポンとプラトンのどちらを優先させるか、端的には、プラトンをどう扱ってそこからソクラテス哲学を取り出すか、という研究課題となってきた。多くの研究者は、プラトン対話篇の中に、実際のソクラテスに由来する「歴史的ソクラテス」と、プラトンの独創による「プラトンのソクラテス」の側面と区別する境界線を引こうとしてきたのである。

この後、筆者はソクラテス問題に対する新しいアプローチを示す。文学部哲学科に興味があり、哲学研究とはどのようなものかを知るためには、この著作を読むことをお勧めする。また、ソクラテスの哲学そのものにも興味がある人は、プラトンの対話篇『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドン』『饗宴』を読むことをお勧めする。

旧約聖書に描かれるイスラエルの民の救いの歴史

■ 天地創造

初めに神は天地を創造した。第1日「光あれ」昼と夜。第2日「大空」天。

第3日「地」草、果実。第4日「太陽、月、星」。第5日 水に群がるもの、鳥。

第6日 地の獣、家畜、土をはうもの、最後に神は自分をかたどって男と女を創造した。(神の [] としての人間) 神は人を祝福して言った。「生めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせ、すべての生き物を支配せよ。」 第7日神は仕事を離れ安息した。

■ アダムとエバ(イヴ)

神は自分に似せて、地の土くれから人を造った。エデンに園を設け、美しく食料となる樹を生えさせ、人を住ませた。神は「すべての樹からとって食べよ。ただし、善悪の知識の樹からは食べてはならない。食べると死ぬからだ。」と命じた。神は人のあばら骨から女を造った。男と女は裸だったが恥ずかしがらなかった。獣の中で最も狡猾な蛇に「それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものになる」とそそのかされて、女は善悪の知識の実を食べ、男にも食べさせた、二人は自分たちが裸であることを知り、無花果(いちじく)の葉で腰をおおった。それを知った神は怒り、女には生みの苦しみを、男には食べ物を得るための苦しみを与えた。エデンの園を追放された二人は [] の支配を受けることになった。

■ カインとアベル

アダムの妻エバはカインを生み、弟アベルを生んだ。アベルは羊飼いとなりカインは土を耕すものとなった。ある日カインは土の実りを神にささげ、アベルは子羊をささげた。神はアベルとその供物に目を留めたが、カインの供物は顧みなかった。カインは激しく怒り、アベルを野原に誘い出し、襲って殺した。カインは神に呪われる者となり、地上をさまようものとなった。

■ ノアの箱舟

すべての肉なるものは墮落し、地上は不法に満ちていた。神は人を造ったことを後悔し、地上から拭い去ることにした。しかし、信仰心をもっていたノアは主の恵みを受ける者となった。神はこういった。「すべての肉なるものを終わらせるときが来た。私は地上に洪水をもたらし、すべての肉なるものを滅ぼす。おまえは箱舟を作って家族とともに入れ。またすべての命あるものを一つがいつつれて入り、お前とともに生き延びるようにしなさい」やがて洪水が起り、水は40日間地上を覆った。すべてが終わったとき、ノアたちだけが残った。箱舟をでたノアは祭壇を作った。神はノアとその子らを祝福して「生めよ、増えよ、地に満ちよ。今後再び洪水によってすべての肉なるものが絶たれることはなく、地を滅ぼすこともないだろう」全世界の人々は、ノアとノアの子([]・ハム・ヤベテ)から出て広がった。

■ バベルの塔

全世界は同じ言葉を話していた。東の方から異動して来た人々がシナルの地に平地を見つけ、住みついた。かれらは「その頂が天にまで達する塔のある町を築き、我々の名を有名にしよう」といい、天に達する塔を共同作業により煉瓦で作った。神はこれを人間の自己神化の試みとみて、以後作業のできないように言葉を混乱させたという。

■ アブラハムの召命

「生まれ故郷を離れ、私が示す土地に行きなさい」という神の命令を受けてアブラム(後にアブラハムと改名)は親族と別れ、妻サライ(後にサラと改名)および彼に同行した甥のロトとともに神の示す地カナンに旅立った。この地でロトと生活圏を分けた後、アブラハム一家はヘブロン付近で過ごしたが、飢饉のためにエジプトに下って難を逃れるなどの苦労を重ねた。アブラハムには、子孫が国民を形成するという契約が神より与えられていたが、約束の子がサライに生まれたとき、アブラハムは100歳で、サライは90歳であったという。後日、アブラハムは神の試練として、このひとり子の [] をいけにえとしてささげるようにとの命令を受けたとき、それに服する姿勢を示して、その信仰のあつさを認められた。アブラハムは〈信仰の父〉として、新約聖書においても尊敬をもって想起されている。

■ ヤコブ

ヤコブはイサクの子とされ、またイスラエル 12 部族の名祖（なおや）であるユダ、ヨセフ、ベニヤミンなど 12 人の息子と娘ディナの父。民族の名祖として、（ ） Israel とも呼ばれた。ヤコブは双生児の兄エサウの空腹につけ込んで一杯の煮豆と引替えに長子権を手放させ、また眼のかすんだ父をだまして、長子エサウに与えられるはずの祝福を奪い、彼の報復を逃れて母方の親族アラム人ラバンのもとに身を寄せるが、両者の間でかけひきとだまし合いがなされた。東方への逃避と帰還の途路、ベテルなど各地の聖所で神顕現を体験した。晩年ヨセフを頼って子らとエジプトに下った。ヤコブは従順なアブラハムと対照的で他者と対立し、ずるくふるまうが、他面、神に必死にすがる姿が描かれており、現実的で魅力に富んでいる。

■ エジプトへ

ヤコブの子、ヨセフは父の年寄り子で偏愛され、また王者となる夢を語ったので、兄弟たちのねたみを買ひ、穴(井戸)に落とされる。結局奴隷商人の手に渡り、エジプトの高官の下僕となったが、主人の妻の性的誘惑を拒んで、かえってぬれぎぬを着せられて獄に入れられる。しかし彼の夢解きの才能が王(ファラオ)に認められて出世、エジプトの宰相となって国政に腕を振るう。飢饉のときにエジプトに穀物を買いに下った兄弟たちの誠意を一度試したのち、劇的に再会と和解を果たし、父と兄弟たちをエジプトに移住させた。ヨセフはこの物語では父ヤコブとは対照的に、忠実で愛情と忍耐力に富み、神の導きを信ずる理想的人間像として描かれている

■ モーセの出エジプト

ヤコブとその息子たちの子孫はエジプトに住み続けた。ファラオ（パロ）は、増え続けるイスラエルの民を奴隷として重労働を課した。ヘブライ人として生まれながら王妃の養子として育てられたモーセは同胞を迫害するエジプト人を殺害し、その露見を恐れて、南パレスティナのミデアン地方に逃亡、そこで祭司エテロの娘と結婚し、羊飼いとして過ごす。ある日、燃える柴の中に神ヤハウェが現れ、エジプトで苦しむ同胞の解放者としての使命を与えられたモーセは、エジプトに戻る。ファラオは祭りのためにヘブライ人を荒れ野に連れ出したいというモーセの申し出を拒否し、ヘブライ人への労役を重くした。神はファラオの拒絶ゆえにエジプトに 10 の災いを与えた。ナイル川が血の色に染まり、蛙、ぶよ、アブが国を襲い、家畜が疫病にかかり、人が腫れ物に悩まされ、雹とイナゴが畑を壊滅させ、3日の間暗闇に覆われ、それでもかたくななファラオに対して、神はエジプトに最後の災厄を与えた。エジプトの初子がすべて、人も獣も疫病によって全滅してしまった。しかし、あらかじめ神の指示通りに小羊の血を入口に塗ったヘブライ人の家だけは災厄は起きずに過ぎ越した。自らも初子を失ったファラオは一度はヘブライ人を去らせることを認めたが、後で心変わりし、軍隊に後を追わせた。葦の海(紅海)の前でエジプトの軍に追いつかれそうになったとき、神は海に道を開き彼らを守った。さらに神はモーセに [] で十戒と律法を与えた。イスラエルの民は奴隷の身分から解放してくれた神との間に契約を結んだ。



出エジプト記 34 章 29-31 節

モーセがシナイ山を下ったとき、その手には二枚の掟の板があった。モーセは、山から下ったとき、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。

アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見ると、なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかったが、

モーセが呼びかけると、アロンと共同体の代表者は全員彼のもとに戻って来たので、モーセは彼らに語った。

ミケランジェロ作モーセ像

イエスの教え 補足プリント

イエスの慰めの物語

遠藤周作『イエスの生涯』(新潮文庫,1982)より

聖書のなかにはあまたイエスと見棄てられたこれらの人間との物語が出てくる。形式は二つあって、一つはイエスが彼らの病気を奇蹟によって治されたという所謂(いわゆる)「奇蹟物語」であり、もう一つは奇蹟を行うというよりは彼らのみじめな苦しみを分かちあわれた「慰めの物語」である。だが、聖書のこの二種類の話のうち、「慰めの物語」のほうが「奇蹟物語」よりはるかにリアリティを持っているのはなぜだろう。「奇蹟物語」よりも「慰めの物語」のほうがはるかにイエスの姿が生き生きと描かれ、その状況が眼に見えるようなのはなぜだろう。

たとえばルカ七章三十六節にこういう話がある。

「パリサイ派の人、イエスを食事に招きしが、イエスその家に入りて食卓につき給いし時、町に住む罪を犯せし一人の女(娼婦のこと)香油盛りたる器をもち来たり、……泪(なみだ)にてその御足を次第にぬらし」

その一節を読むだけで、我々はそこに描かれていないさまざまな状況をまぶたに浮かべることができる。

おそらくこの話に出てくる娼婦はマグダラか、その付近に住む貧しい娘だったのだろう。生きるために彼女はさまざまな男に体を与え、男たちはその体を弄(もてあそ)んでくせに彼女を蔑(さげす)みながら金を与えたのであろう。男と横になっている時、彼女は闇の中に空虚(うつろ)な眼をじっと見ひらいて身じろがなかつただろう。

イエスのことを彼女は誰に聞いたのだろうか。どうして彼女は彼をたずねようと思ったのだろうか。ひょっとすると、ある夜、自分を買った男から耳にしたのかもしれない。湖畔にじっと腰かけている疲れたような彼の姿を遠くから見たのかもしれない。

彼女はイエスがどんな人かは知らなかったにちがいない。ただその姿から言いようのない「やさしさ」を見ぬいたのだろう。自分の惨めさにも自分にたいする蔑みにもあまりに馴れていた彼女は、どんな人が本当の心のやさしさを持っているか本能的に感じたのだ。

イエスが食事をしている家がパリサイ派の男の家であったため、彼女はおそらくその中に入る時、下男たちから遮(さえぎ)られたであろう。パリサイ派の人たちには娼婦などは話しかけることも避けねばならぬ賤しい、恥ずべき女だった。旧約の世界では彼女たちはしばしば預言者たちの呪いの対象となっている。だから下男たちの制止をふりきって彼女は広間にはいり、食卓から驚いたようにふりむいた人々の視線を浴びながら、イエスの前まで一直線に歩いていったにちがいないのだ。

彼女は何も言わなかった。何も言わずイエスを見つめただけだった。やがてその眼から泪が溢(あふ)れでた。その泪だけで今日までの自分の哀しみを訴えた。「泪にてその御足をぬらし」という簡潔な表現がこのときの彼女の惨めさと苦しさとをはっきりと私たちに伝えてくれる。

その泪でイエスはすべてを知られた。この女がどんなに半生、人々から蔑まれ、自分で自分の惨めさを嘔みしめたかも理解された。その泪で充分だった。神がこの女を悦んで迎え入れるには、それで充分だった。

「もう、それでいい。わたしは……あなたの哀しみを知っている」

とイエスは彼女にやさしく答えた。彼がこの時、つぶやかれた言葉は聖書のなかでも最も美しいものの一つである。「この女は多く愛したのだ」そして、イエスは次のように言った。

多く愛するものは

多く許さるる……

この「慰めの物語」には数多くのイエス奇蹟物語よりも、はるかに生き生きとわれわれに訴えるものがある。「泪、次第にその足をぬらし」という女の悲しみの表現と「多く愛する者は多く許さるる」と女をゆるすイエスの静かな声とはわれわれを感動させずにはおかぬ響きがある。

もう一つ、別の「慰めの物語」を例にとろう。マルコや、ルカやマタイがそれぞれ記述している。長血を患う女の話である。

「ここに十二年、血漏を患える女ありて、あまたの医師にかかりて様々に苦しめられ、持てる物を悉（ことごと）く費やしたれど何の効（かい）もなく、却って益々、悪しかりしにイエスのことを聞きしかば、雑踏のうちより後ろに來たりて、その衣服に触れたり。……イエス、たれかわが衣服に触れしぞと問い給いければ、……」（マルコ、五の二十五）

これもガリラヤ湖畔のひとつの村で起こった出来事である。長血という不治の病にかかった女がその苦しきのあまり、イエスを見るために集まった群衆のかげにかくれ、その衣服におずおずと指に触れてみる。女にとっては藁をもつかむ気持ちだったのだろう。

おずおずと触れた指でイエスは彼女の今日までの苦しさをすべて、その藁をもつかみたい気持ちを感じとる。

「誰かが、私の服に触れた」

と彼は弟子をふりかえる。弟子たちは笑いながら答えた。

「これだけ、おびただしい人がいるのです。ぶつかるのも仕方がありますまい」

「いや、そうではない」イエスは首をふられた。「誰かが私の衣服にふれたのだ」

そして自分を見つめている多くの顔のなかから彼は怯えた女の表情を発見する。

この物語はイエスが彼女の病を治すという奇蹟物語が混じてはいるが、私たちの心を動かすのは彼女の病気がイエスの奇蹟で治されたという結末よりも、おずおずと衣服に触れたその女の指一本から彼女の切ない苦しみのすべてを感じとったイエスである。たくさんの人々の蔭からそっと差しだされた女の指、衣にかすかにふれただけでイエスはふりむく。彼は彼女の苦しみのすべてがわかったのだ。我々にはその時の女の怯えた顔もイエスの辛そうな表情も、このおずおずとした指一本からはっきり想像できるのだ。

【よきサマリア人のたとえ】

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」

イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどう読んでいますか。」

すると彼は答えて言った。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。」

イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」

イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎとり、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。ところが、あるサマリア人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」

彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」

するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」（ルカ 10：25-37）

サマリア人：イスラエル人と、移民との間に生まれた人々。ユダヤ人にイスラエル人の血を穢した者といわれ迫害を受けていた。

レビ人：ユダヤ教団で祭司階級の下に置かれ、祭司に従属する職として教化活動などに携わった人々。

原始キリスト教 補足プリント

■ キリスト教会の誕生 五旬祭（ペンテコステ）

※ 五旬祭（ペンテコステ）：過越（エジプト脱出）から五十日目にシナイ山で十戒を受けたことを記念するユダヤ教の祭り ⇒ 聖霊がイエスの使徒たちに降った記念日

使徒言行録 2章 1節-42節

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。

人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。

しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているわけではありません。そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。



『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしたためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。上では、天に不思議な業を、／下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。主の偉大な輝かしい日が来る前に、／太陽は暗くなり、／月は血のように赤くなる。主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたが

たに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおります。

このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまわれたのです。

しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。

ダビデは、イエスについてこう言っています。

『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、／わたしは決して動揺しない。／だから、わたしの心は楽しみ、／舌は喜びたえる。体も希望のうちに生きるであろう。／あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、／あなたの聖なる者を／朽ち果てるままにしておかれぬ。／あなたは、命に至る道をわたしに示し、／御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。

そして、キリストの復活について前もって知り、

『彼は陰府に捨てておかれず、／その体は朽ち果てることがない』
と語りました。

神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。

それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。

『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。／わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。』』

だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです。」

人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。

すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。

この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。

ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

初期教会の公会議——主に東方の教会で三位一体とキリスト論をめぐる論争

■ ニカエア公会議（325年、ローマ皇帝コンスタンティヌス1世召集）

アレクサンドロス（アリウス）の主張

子なるキリストが生まれた者ならば、子は創造された者であり、父なる神と子なるキリストが同質ではありえず、異質的（ヘテロウシオス）である。

アレクサンドロス（アレクサンドリア主教）の主張（助祭としてアタナシオスを伴う）

父なる神と子なるキリストはホモウシオス（同一本質：同質）である。

アタナシオス（アタナシウス）の主張

キリストは受肉した神のロゴスであり父とホモウシオス、さらに聖霊についてもその神性と父なる神との同質を説き、三位一体説を完成させた。この立場はキリスト教神学の正統となった。

⇒ ホモウシオス派のニカエア信条（三位一体の信仰を定めたもの）を採択し、アリウス派は追放

→しかし、アリウス派はニカエア公会議ののちも多数の解釈と信奉者を有し（皇帝コンスタンティヌスもアリウス派の洗礼を受ける）、ゴート人にも伝わる

※『教会史』の著者、カイサレアのエウセビオスも会議に出席、ホモウシオス説に疑問を持つ

■ コンスタンティノーブル公会議（381年、アリウス派論争終結のため皇帝テオドシウス1世召集）

アポリナリオスの主張（アポリナリオス主義）

キリストは人間としての肉体と魂を有するが、理性に当たるものは神のロゴスである。すなわち、肉体と魂から成るふつうの人間とは異なり、キリストの人性においては肉体と魂に起因する迷いも誤りもありえない。⇒ 反アリウス派だが、異端とされる

⇒ ニカエア信条が確認され、父なる神と子なるキリストが〈ホモウシオス（同一実体）〉であるとの定式が正統信仰として最終的に確立

■ エフェソス公会議（431年、ネストリウス問題の解決のために皇帝テオドシウス2世召集）

ネストリウス（コンスタンティノーブル主教）の主張

キリストの神性と人性の区別を明確にすべきであり（神人二つの位格を持つ）、聖母マリアは「神の母」ではなく「キリストの母」である。（反アポリナリオスの立場から）

キュリロス（アレクサンドリア主教）の主張

キリストにおける神性と人間性の緊密な合一「受肉した神なるロゴスの唯一の本性」

⇒ネストリオスの追放、

→ネストリオスを支持した東シリアのネストリウス派はペルシャから中国まで布教→景教

■ カルケドン公会議（451年、単性論派問題の解決のため皇帝マルキアヌス召集）

エウテュケスの主張（単性論）

キュリオスの説の発展。受肉以前のキリストにおける神性と人性の両性は、受肉後に神性が人性を吸収して単一の性になる

⇒キリスト両性説（神人両性一位格）を正統とし、単性論を異端として排除

→エジプト、シリア、パレスチナなどの東方諸教会は単性説を支持、現在でもコプト教会（エジプト）エチオピア教会、アルメニア教会などは単性論派教会

■ グレゴリウス（1世）Gregorius（540ころ—604）

ローマ教皇（在位 590～604）。聖人。西方の四大教会博士（アンブロシウス、ヒッポのアウグスティヌス、ヒエロニムス）の1人。大教皇 Magnus と称される。ローマ市の名門に生まれ、若くしてローマ市総督となったが、まもなく修道生活に入る。コンスタンティノープル駐在教皇使節、教皇顧問などを歴任後、意に反して教皇に選出され、最初の修道者出身の教皇となった。登位後は、ランゴバルド勢力の侵攻に対し、弱体化したビザンツ帝権にかわってローマ市および中部イタリアのローマ系住民の保護者の役を担った。アフリカ、西ゴート王国、ランゴバルド王国、フランク王国の諸教会を教皇座に緊密に結び付けようと努め、ケント王国に宣教師団を派遣してアングロ・サクソンの教化に先鞭(せんべん)をつけた。これらの業績によってグレゴリウスを「最初の中世的教皇」とよぶ人もいる。『司牧規則』『道徳論』『対話』をはじめ膨大な著作、説教、書簡があり、近代に至るまで西方キリスト教世界の精神に大きな影響を与えた。典礼改革を推進して「グレゴリウス典礼書」の形成に寄与し、また教会音楽の改良にも力を入れて、いわゆる「グレゴリオ聖歌」の形成過程に一定の役割を果たした。

『日本大百科全書』（小学館）

■ 聖像破壊（イコノクラスム）

字義的に、イコンすなわち聖画像の破壊を意味し、イコンの礼拝のみならず、その制作をも許されないとみなす思想。726 - 787年, 815 - 843年, ビザンティン皇帝たちによって国家の宗教政策とされ、この帝国における国家と教会との独特の関係を背景に(皇帝教皇主義), その経過で宗教以外の領域をも巻き込んで、歴史的な大事件となったばかりでなく、その余波は遠くカロリング朝フランク王国にまで及んだ。

レオ3世が726年、当時特別尊崇をあつめていたコンスタンティノープルのハルコプラティア地区のキリスト像を撤去させ、730年勅令(偶像破壊令)をもってイコンは偶像だとしてその礼拝を禁止した背景には、ウマイヤ朝カリフ、ヤジード2世(在位720 - 724)の同趣旨の法令発布や、ユダヤ教、キリスト教異端パウルス派における、キリスト教徒を偶像崇拜主義者だとする批判の声のほか、キリスト教内部における長い論議があった。

神学的に議論が深化したのは第1期であり、イコン礼拝派には、8世紀前半、ダマスクスの修道士ヨハネスが現れ、キリスト本体論を論拠に、ロゴスの人間化ゆえにキリストのイコンは正しい、不可視の神は像化できないが、キリストは、神が人として現れたものであるゆえに像化できる、この人間化により物質は浄化され、物質もキリストを描くのにふさわしいものとなった、イコン礼拝はしたがってこの浄化に対する信仰告白を意味する、とした。

これに反駁したのがコンスタンティノス5世であり、キリストの像化はその神性の像化ゆえに許されない、キリストの唯一の真の像は聖餐でしかなく、ここにおいてのみ、像とその本体との同一性が保持されている、と主張した。

ビザンティン帝国のイコノクラスムは、時代的に、787年コンスタンティノス5世の母である摂政イレネのもとでニカエア公会議がイコン礼拝を復活してから、レオン5世が815年それを再び禁止するまでの一時期をはさんで、第1期、第2期に分かれ、843年ミハエル3世の母である摂政テオドラが再びそれを復活して、イコノクラスムは最終的に終わった。

『世界大百科事典』（平凡社）

仏教の思想——人間の不幸と苦しみについて

◆防人の歌 【作詞】さだまさし 【作曲】さだまさし

おしえてください
この世に生きとし生けるものの
すべての生命に限りがあるのならば
海は死にますか、山は死にますか、
風はどうですか、空もそうですか、
おしえてください

私は時折苦しみについて考えます
誰もが等しく抱いた悲しみについて
生きる苦しみと老いてゆく悲しみと
病の苦しみと死にゆく悲しみと
現在の自分と

答えてください
この世のありとあらゆるものの
すべての生命に約束があるのなら
春は死にますか、秋は死にますか、
夏が去る様に冬が来る様に
みんな逝くのですか、

わずかな生命のきらめきを信じていいですか、
言葉で見えない望みといったものを
去る人があれば来る人もあって
欠けてゆく月もやがて満ちて来る
なりわいの中で —後略—

◆仏教思想に見られる「苦」

四法印：仏陀の悟った4つの法（ダルマ：正しい教え＝真理）

一切皆苦：人生のすべては苦であること

諸行無常：すべてのものは常に変化しとどまることがないこと

諸法無我：すべての存在（法）には固定的な実体がないこと

涅槃寂靜：煩惱を離れ、苦を滅した悟りの境地が涅槃であること

四諦：仏陀の悟った4つの諦（サティア：真理・真実）

苦諦：人生は苦しみであること

集諦：苦しみの原因は渴愛（欲望）・煩惱（悪しき心）であること

滅諦：煩惱が消え、苦しみが滅したところに涅槃の境地があること

道諦：涅槃に到達する道が八正道であること

四苦：生、老、病、死

八苦：四苦に加えて、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦

ワークシート 苦しみとは何か 3年 組 番 氏名

◆人間にとって「苦しみ」とはどのようなことだと思いますか。あなたの考えを書いてください。

- グループを作ったら、すぐに発表者を一人決めてください。
 - グループで各メンバーは「苦しみ」についての考えを発表してください。
 - すべてのメンバーが発表した後、その発表を聞いて気づいたことをグループの中で話し合ってみてください。
- ◆あなたのグループでは「苦しみ」とは何かについて、どのようなことに気づきましたか。話し合った内容をまとめてください。

◆【授業の振り返り】あなたの「苦しみ」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

中国思想の人性論——人間の本性とはどのようなものか

◆人間なんて 【作詞】 吉田拓郎 【作曲】 吉田拓郎

人間なんてラララ ラララララ
人間なんてラララ ラララララ

何かがほしいおいら
それがなんだかわからない
だけど何かたりないよ
いまの自分もおかしいよ

そらにうかぶ雲は
いつかどこかへとんでゆく
そこになにかがあるんだろうか
それは誰にもわからない
※人間なんてラララ ラララララ
人間なんてラララ ラララララ

(※くり返し)

◆中国思想の人性論に見られる「性」

人性論：人間の本性がどのようなものであるかについての論考

性：人間が生まれながらにもつ性質

『論語』：「性相近し、習い相遠し。(人間は生まれながらの本性はそれほど変わらないが、学習によってずいぶん違ったものになる)」

『中庸』：「天の命ずるをこれ性と謂い、性に率うをこれ道と謂い、道を修むるをこれ教えと謂う。(天の命令するものを性(生まれつき備わる性質)といい、その性にしたがって行うことを道といい、その道を修得することを教えというのである)」

告子(墨家)：「性には善なく不善なし」と主張したことで知られる。告子の性とは生まれつきの本能をいい、食欲や性欲を主要素と考えているが、「性は渦を巻いて流れる水のようなもので、東の方へ堤を切り開くと水は東へ流れ、西の方へ切り開くと西へ流れる。性に善悪の区別がないのは、水に東西の区別がないようなものである」と説いた。

孟子(儒家、性善説)：人間は生まれながらに「良知良能(善を知り、それをなす能力)」と四端(惻隠(あわれみいたましく思う)、羞惡(不善をはじにくむ)、辞讓(目上にへりくだり譲る)、是非(正邪を判断する))を持つ。四端が四徳(仁義礼智)のもととなるがゆえにその本性は善である。それでは、性の善なる人間が、悪事をはたらくことがあるのはなぜか。それはおかれた環境による。

荀子(儒家、性悪説)：「人の性は悪なり、その善なる者は偽なり」偽とは、作為のことで、後天的努力をいう。人は無限の欲望をもち、放任しておけば他人の欲望と衝突して争いを起こし、社会は混乱におちいるであろう。放任しておくとも悪にむかう人の性、それは悪といわざるをえない。性の悪なる人間を善に導くためには、作為によって規制しなければならない。

ワークシート 人間の本性とは何か 3年 組 番 氏名

◆人間の本性はどのようなものだと思いますか。あなたの考えを書いてください。

- グループを作ったら、すぐに発表者を一人決めてください。
 - グループで各メンバーは「人間の本性」についての考えを発表してください。
 - すべてのメンバーが発表した後、その発表を聞いて気づいたことをグループの中で話し合ってみてください。
- ◆あなたのグループでは「人間の本性」とは何かについて、どのようなことに気づきましたか。話し合った内容をまとめてください。

◆【授業の振り返り】あなたの「人間の本性」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

哲学カフェ1 テーマ 人間にとって知とは何か

今回の授業は、哲学カフェスタイルの授業を行います。これまでのアクティブラーニング型授業のように、机を6つの島にくっつけて、お茶やジュースでも飲みながら意見の交換をしましょう。このページには「人間にとって知とは何か」を考える材料を少しだけ掲載しておきます。

◆「知」についてこれまでに学んだこと

ギリシア哲学において、哲学（ΦΙΛΟΣΟΦΙΑ）とは知恵を愛し求めること

プラトンは知恵、勇気、節制、正義を四元徳とした

人間の学名 ホモ・サピエンス（Homo sapiens）とは「知恵のあるヒト」の意味

◆フランシス・ベーコン（1561～1626 イギリス）の語る知

「知は力なり」（scientia est potentia）⇒知によって自然を征服する

人間は、自然に奉仕するものであり自然を解釈するものであるが、彼は自然の秩序について、実際に観察したか精神によって観察したことだけを為しかつ理解する。

…素手や放任された知性はたいしたことができない。道具や補助手段によって物事はなしとげられるのであって、手にとって同様知性にとってもそれらは必要である。

…人間の知と力は一つに合する。原因が知られなくては結果は生じないからである。というのは、自然は服従することによってでなくては征服されないのであって、考察において原因にあたるものは、制作においては規則である。

フランシス・ベーコン『ノヴム・オルガヌム』

◆ジャン・ジャック・ルソー（1712～78 フランス）の語る知

「知識は危険な武器として墮落の道具になりかねない」

なんらの結果もないところには、探求すべき原因はない。しかし、この場合、結果は確実であり、墮落は現実的である。そして、われわれの魂は、われわれの学問と芸術が完成に向かって前進するにしたがって腐敗した。人はそれがわれわれの時代に特有な不幸であると言うだろうか。いや、われわれの好奇心によって引き起こされた害悪は世界と共に古いのだ。…人びとは学問、芸術の光がわれわれの地平線上にのぼるにつれて、美德が逃れ去るのを見た。そして同じ現象があらゆる時代、あらゆる場所において観察されたのだ

ジャン・ジャック・ルソー『学問・芸術論』

■ 哲学カフェのルールは以下の通りです

意見を述べたい人は挙手をしてください。

意見を述べた人に対して質問をしたい時も挙手をしてください。

複数の挙手があった場合は進行役が指名しますのでそれから意見を述べてください。

意見を述べている人の話が続けているうちは挙手をしないでください。

意見を述べる前に近くの人と相談してもかまいません。

ワークシート 人間にとって知とは何か 3年 組 番 氏名

◆人間にとって「知」とは何だと思えますか。あなたの考えを書いてください。

■まずは10分間かけて、いつものように自分の考えをまとめてみよう。

■自分の意見を発表したい人や、意見に対して質問をしたい人はどんどん挙手をして発言しよう。

◆このクラスで出てきた印象的な意見をここに書いておきましょう。

■残り10分で今回の哲学カフェを振り返って考えてみよう。

◆【授業の振り返り】あなたの「人間の知」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

哲学カフェ2 テーマ 人間にとって美とは何か

2回目の哲学カフェスタイルの授業です。まずは、10分間「洞窟の哲学」として、裏面に自分の考えた意見を書き込んでから、これまでのアクティブラーニング型授業のように、机を6つの島にくっつけて、お茶やジュースでも飲みながら意見の交換をしましょう。このページには「人間にとって美とは何か」を考える材料を少しだけ掲載しておきます。

◆「美」についてこれまでに学んだこと

善美（カロカガティア）とは、ギリシア語の二つの形容詞〈カロス kalos（美しい）〉と〈アガトス agathos（善い）〉をつないだ合成語

「調和」を重んじたピタゴラス学派において、善と美とは原理的に同一のものの2相ととらえられ、心身の調和的発達による善美の実現こそ、人間完成の理想とするギリシアの教育観へ受け継がれた。

◆プラトンの語る美

美そのもの（美のアイデア）以外に何か美しいものがあるなら、それは他ならぬ美そのものを分有していることによって美しい。

プラトン『パイドン』

◆カント（1724～1804 ドイツ）の語る美

我々が咲いているバラの花を見て美しいと感じるとき、ふと一緒に傍らで見ている他人にその気持ちを伝えたいと欲し、また当然彼も自分と同じ気持ちでいるだろうと期待するときのことを思い起こせば、このこと（美しいと感じる感覚があらゆる人に共通していること）はごく自然に理解されるだろう。そしてまた、心性の状態を伝達できることが快を伴うことは、人間の社交性に向かう自然的性癖から容易に説明されうることでもある、とカントも説明している。

志水紀代子「美学的判断力と目的論的判断力——自由実現をめぐる」『カント読本』

■ 哲学カフェのルールは以下の通りです

意見を述べたい人は挙手をしてください。

意見を述べた人に対して質問をしたい時も挙手をしてください。

複数の挙手があった場合は進行役が指名しますのでそれから意見を述べてください。

意見を述べている人の話が続けているうちは挙手をしないでください。

意見を述べる前に近くの人と相談してもかまいません。

ワークシート 人間にとって美とは何か 3年 組 番 氏名

◆人間にとって「美」とは何だと思えますか。あなたの考えを書いてください。

■まずは10分間かけて、いつものように自分の考えをまとめてみよう。(洞窟の哲学)

■自分の意見を発表したい人や、意見に対して質問をしたい人はどんどん挙手をして発言しよう。
(広場の哲学)

◆このクラスで出てきた印象的な意見をここに書いておきましょう。

■残り5分で今回の哲学カフェを振り返って考えてみよう。

◆【授業の振り返り】あなたの「人間にとっての美」についての理解は授業の前と後でどのような変化がありましたか。その他学んだこと、気付いたことなどを振り返ってください。

